

お弁当の日々

私が子どもの頃も、幼稚園、小学校、中学校の間は給食でした。学校のブログにも、私が子どもの頃の給食の思い出を掲載しています。

私が子どもの頃も今と同じで、「給食」がほとんどで、遠足など時々「お弁当」というのが普通だったのですが、私が小学校の3年生か4年生の頃、数か月間、毎日お弁当を持って行ったことがありました。その理由は、学校の給食調理場を建て替えるため給食を作ることができなかつたからです。

その話を聞いた時、私は大喜びでしたが、母親は機嫌が悪かったように記憶しています。はっきりとは覚えていませんが、おそらく2か月くらいは、毎日お弁当を持って行ったと思います。今考えれば、母親の機嫌が悪くなるのも分かります。当時は、母親と言えば主婦というのが当たり前でしたが、うちは、両親共に働いていました。父親は、毎日お弁当を持って仕事に行っていたので、ついでと言えついでなのですが、小学生の子どもにお弁当を持たせようとするれば、ついでとはいかなかったようです。仕事に行く前に大人と子どもの2人分のお弁当を毎日作らなければならない苦労を考えると、母親の機嫌が悪くなることくらいで済んだのが不思議でした。今ではちょっと考えられないのですが、まず、冷凍食品が無いのでチンしてお弁当に入れることができません。もちろん、電子レンジという機械もありませんでした。お弁当自体を売っている店がありませんでした。もちろん、コンビニという店もありませんでした。そして、給食センターというものも無かったので、どこから給食を運んでくることもできませんでした。つまり、給食が無くなると、家でお弁当を作って持ってくるしか方法が無かつたということです。

しかし、私は大喜び。遠足のお弁当を毎日食べることができると思っていたのですから。しかし、現実はそのようではありませんでした。最初は毎日、おにぎりでしたが、そのうちご飯の上に梅干しが1コというパターンで弁当箱の3分の2、残りの3分の1に、あまり鮮やかな色ではないおかず（煮物とか焼き魚とか）が入るといったものになってきました。デザートもだんだんと姿を消していきました。ある時、「お母さん、お弁当、おにぎりにしてよ。」とお願いしましたが、あかぎれで、ほうぼうに傷がある母の手を見て、「やっぱり、ご飯の方がええわ。」と、言い直したこともありました。

母親にとっても私にとっても長く感じたお弁当の日々だったと思います。

時は経って、私は高校に入学しました。高校は給食がありませんので、毎日、母親がお弁当を持たせてくれました。こちらは3年間なので、もっと大変だったと思います。実は、毎日お腹をすかしているわけではありませんでした。お弁当を食べたくない気分の日もありました。苦労して作ってくれた母に申し訳ないので、お弁当を残す時は、できるだけ早く帰宅して分からないように中身を捨てて、また包み直したものでした。「今日も、お弁当残さず食べたんやな、よかった！」と言う母の言葉を聞きながら、返事ができなかつたのを覚えています。

それから何十年。私の娘が高校に進学してからの約3年間。私は、娘のお弁当を作り続ける日々を過ごしました。しかし、私の子どもの頃とは違います。冷凍食品をチンして入れる技を駆使しながら、本当に申し訳ないお弁当でした。女子高生が持つて行くような（見たことがないので分かりませんが・・・）お弁当とは程遠いお弁当でも、娘はほとんど文句も言わずに持つて行ってくれました。まあ、私が娘のためにしたというのは、この「お弁当」くらいしかありませんが・・・。

今なら、母親にもう少し感謝していたと思います。今なら、娘に、もう少し料理を勉強して毎日楽しみになるようなまともなお弁当を少しは作ることができたと思います。この場を借りて「ありがとうございました。」「ごめんなさい。」を言わせていただきます。

この記事をご覧になっている皆さんも、「お弁当の思い出」や「お弁当に対する思い」が、きっといろいろあると思います。「お弁当」って深いですね。

「鍵っ子」だった私

最近は、「鍵っ子」という言葉もすっかり聞かなくなりました。あまりこの言葉を聞いたことがない人のために「鍵っ子」というのは、「学校からの帰宅後、一定時間、継続的に面倒を見てくれる人がいない子ども」のことです。1960年代から都市において共働き家族が増加し、親よりも早く帰宅する子どもが家の鍵を預けられて放っとかれる状態が目立ってきたことから生まれた流行語です。

一昨年度の「独り言」に書きましたが、私の両親は、共に働いていたため、幼稚園に通うまではベビーシッター（子守りさん）に面倒を見てもらっていました。幼稚園に通い出してからは、家に帰った後は、近所で瓦屋を営んでいた祖父母の家に行くことはありましたが、一人で家にもありました。小学校に入学してからは、間違いなく「鍵っ子」でした。今とは違って、幼稚園児でも歩いて子どもたちだけで帰っていました。私の場合、幼稚園からの帰り道は、最後は私、一人だけになってしまいますが、近所のおじいさんやおばあさんたちが、いろいろな所で見守り、声をかけてくれたので（初めてのおつかいのように）大丈夫でした。今では、本当に、想像もできないことですね。

まあ、50年も前の話ですし、田舎のことですし、私の家は、鍵など一切かけたことがありませんでしたから「鍵を持たない鍵っ子」というのが正しいのかもしれませんが・・・。

では、学校から帰って、親が帰宅するまでの間、どのように過ごしていたか？ということですが、まず、ランドセルを玄関に放り投げたら、すぐに近所の公園か広場に走って行きます。そこにいると近所の子どもたちが自然に集まってくるのです。その中でも一番年上の子が「ガキ大将」と呼ばれていました。まあ、近所の子どもたちのリーダーです。そのガキ大将の指揮の下、みんなで遊ぶのです。まるで兄弟のような、いや家族のようなものです。大きな子は小さな子の監督やお世話もします。怪我をさせないようにするのも、もし怪我をしたらおんぶして家に連れて行って家の人に謝るのもガキ大将の役目でした。まあ、親代わりみたいな存在でした。ですから、遊びの主導権はガキ大将にしかありません。今日は、木登りをすると、ガキ大将が言えば、全員が木登り、鬼ごっこをすれば鬼ごっここといった具合です。小さな子の面倒を見ると、ガキ大将から命令されることもあります。ぜったいに逆らうことは許されませんでした。

ガキ大将が怖くて、いやいや命令に従っていたのかと思う方も多いでしょう。しかし、案外、そうでもなかったと思います。嫌ならランドセルを放り投げて遊びになんか行きません。集まってガキ大将の指揮の下、遊ぶのが楽しくて仕方なかったように思います。遊びが終わると、ガキ大将がポケットからミカンを出して、それをむいて、みんなで分けて「おいしいね！」と言いながら、一粒のミカンを食べるのも楽しかった思い出です。

都会では、鍵っ子が孤独に過ごしていたのかもしれませんが、田舎では、鍵っ子であろうがなかろうが、近所の子どもが集まって暗くなるまで遊ぶのですから関係ありません。真っ暗になって家に帰った頃には、母親が台所で夕飯の支度をしていて「また、あんた宿題もせんと遊びまわってたん。ご飯までにしなさい！」と、必ず叱られたものです。

しかし、この生活も私が小学校の高学年になった頃にはすっかり変化してきました。近所の子どもが集まって遊ぶという習慣が崩れ始めたのです。いつの間にか、学校から帰って、一人でいるという生活になっていました。でも、その時は、もう5年生か6年生でしたので、一人でいるのも悪くない感じはしていました。4歳年上の姉も、そのうち帰宅してきましたので・・・。

私の世代が、きっとガキ大将と鍵っ子の境目みたいな時代を生きたのではないかと思います。きつとこのような変化によって、私たちの世代は大人になってから「新人類（これまで常識とされてきたこととは異なった価値観や考え方、行動規範をもつ若者）」と呼ばれるようになったのではないかと思います。

とにかくこわかった祖父

おじいさんやおばあさんというと、「優しい」というイメージをもっている人が多いのではないのでしょうか？私は、「祖父は、こわい人。」という印象が強いのです。それしかないのです。私の母方の祖父は、近所で瓦屋を営んでいました。私は、幼い頃からその工場を遊び場代わりにしていました。仕事中の祖父は、とにかくこわかったのです。なんでいつもあんなに怒っているのだろうと思うくらい職人さんや祖母に対して怒鳴り続けていました。職人さんの一人に「たくまさん」と呼ばれていた背中が丸くなったおじいさんがいました。仕事の合間に、私に粘土を持ってきてくれたり、昼休みに遊んでくれたりしました。その「たくまさん」にも、祖父は、ずっと怒鳴り続けていたのです。明治生まれの職人（親方）ですので、その頃は、それが当たり前だったのかも知れませんが、私も幼かったので、「ずっと怒鳴り続けて」と思い込んでいただけなのかも知れませんが・・・。

「こらっ！あれだけ言うとなつたやろが！何考えとんじゃ。」なんてのは当たり前。「お前、何十年経ったらまともに仕事ができるんじゃ！一生半人前じゃの！」という言葉と共に、セメントに向かって叩きつけられる瓦の割れる音が、恐怖心を倍増したのかも知れません。私から見ると、きれいに焼き上がった瓦を、とにかく、憎しみを込めたように片っ端から叩き割っていくのです。その破片が、私の足下にも転がってきました。祖父が、他の場所に行くと、「たくまさん」は、竹ぼうきで破片を集めていきます。そして、また、黙々と作業を始めるのです。

今考えると、祖父は仕事に厳しかっただけだと思うのです。「一生に一度の新築の家の屋根になる高価な瓦や、いいかげんな物は出せん。」と、瓦屋を廃業する直前、一度か二度、つぶやいた祖父の言葉通りに仕事をしていた、祖父は真真正直な頑固者だけだったのでしょうか。

そんな祖父ですので「おじいちゃん！」と、自分から甘えていったことは一度もありませんでした。

ところで、祖父の瓦工場の真向かいに「ちおや」という「うどん屋」がありました。そこには、うどんだけではなく、おでんやアイスクリーム、大判焼き、ちょっとした駄菓子もありました。もちろんお酒も出していました。私は、100円札を持って、うどんと大判焼きを買いに「ちおや」へ行ったものでした。すると、時々ですが、店の奥の方にお酒を飲んで酔っ払っている祖父を見ることがありました。いつもは無口でしかめっ面ばかりの祖父も、その時ばかりは、「おう、うどん買いに来たんか。おかみ、わしの孫に大判焼き2つ持たせてくれ！」「うどんができるまでこっち来てすわれや、ジュース飲むか？」と、とても愛想が良かったのです。私は、喉から手が出るほどジュースが飲みたかったのですが、祖父とその周りいる酒とたばこのにおいのするおじいさんたちの顔や声が怖くて、首を横に振って、じっとしていたものです。うどんは、その店で食べたことは一度もありませんでした。「おかもち」という木の箱にうどんを入れて、紙袋に入れてくれた大判焼きを2つ手に持って、逃げるように店を出たものでした。祖父は、しつこくは言いませんでした。「うちの孫は、おとなしいきん、うどんは、家に持って帰って食べるんや。」と、お酒を飲んでる友人に話すくらいでした。

満州で終戦を迎えて、その後はとても苦勞して命からがら日本に戻ることができた祖父、みんなを怒鳴りつけるばかりの祖父も、私が就職する前に亡くなってしまいました。亡くなる直前まで、髪はふさふさで、毎日、牛肉を1kgも食べていたそうです。

ただ、一つだけはっきりと言えること。それは、祖父は、私に対しては、怒鳴りつけたり叩いたりしたことは一度もなかったということです。粘土を練る機械の中に、私がいたずらをして釘を入れてしまった時でさえ「ええか、この機械に釘を入れたら、瓦の中に釘が入ったまま焼くことになるやろ。そしたら瓦は割れるやろ。割れたらそこから雨漏りがする。お前は、そんな家に住みたいか？」と諭すように叱られたのです。きっと、明治生まれの頑固職人も、孫だけには甘かったのでしょうね。

それでも、私は祖父の印象と言えば「こわい人」しか残っていないのです。不思議に今、思い出す祖父の顔は、お酒を飲んで赤くなった、しわだらけの笑顔だけなのですが・・・。

泳ぐのが苦手だった私

本校でも水泳が始まりました。「水、大好き!」、「プール大好き!」、「泳ぎ得意!」という子どもたちも多いことでしょう。

実は、私は「水は大好きだけど、泳ぎはあまり得意ではない!」という子どもでした。特に苦手だったのは、「息継ぎ」です。先生に教わっても「息を水中ではいて、顔が水面に出たらパッと残りの息をはいて・・・。」というのが頭では理解できても、実際やってみると、息が入ってこなかったり、水中で息を吸ってしまって大変なことになったりしました。ですから、途中から息継ぎをあきらめたわけです。息継ぎをあきらめても水の中に潜ったり、泳いだりするのは好きでした。ですから、けのびや石拾いは得意中の得意で、12mくらいの競争は、息継ぎをしなくていいので、いつも1番か2番でした。ところが、何メートル泳ぐことができるのかという「泳力測定」が嫌で、嫌でたまりませんでした。25mを泳ぎ切って喜んでいる友達をうらやましく思っていました。せいぜいプールの真ん中くらいまでいけたらいいほうでした。

実は、息継ぎができないのが恥ずかしくて、息継ぎをしているまねをしていたのです。ですから友達や先生から「何でそこでやめるの?」と不思議がられていたのです。

小学校6年生になって、泳ぐのだけは速くなって、25mならノーブレス（息継ぎなし）で泳ぐことができるようになりました。息継ぎは格好だけです。さすがに25mのターンで息をしても折り返して50mは絶対に無理ですので、水泳の選手にはなれませんでした。

恥ずかしながら、完全に息継ぎができるようになったのは、教員になってからです。子どもたちに息継ぎを教えながら、自分もできるようになったのです。もともと泳ぎだけはできましたので、息継ぎをマスターすれば何百mも泳ぐことができました。それが23歳の頃のことです。22歳までは、恥ずかしながら25mが限界でした。

今思えば、素直に、できるようになるまで友達や先生に教えてもらっていたら、こんなに苦労はしなかったのだと思います。もしかしたら、水泳大会にも出場できたのかもしれない。でも、その時は、恥ずかしくて「息継ぎができないから、やり方を教えて。」と、どうしても言えなかったのです。「聞くは一時の恥 聞かぬは一生の恥」という言葉が身にしみます。こんな言葉があるくらいですから、私と同じような経験（恥ずかしくて聞けなくて、かえって長い間、恥ずかしい思いを引きずってしまった経験）をした人も多いのかも知れませんね。

校舎の思い出

私が小学校に在学していたのは昭和40年代ですので、詫間小の子どもたちや、保護者の皆様方には「想像もできない昔」と感じていらっしゃる方も多いことと思います。

私が通っていた学校（高瀬町立勝間小学校）は、木造の二階建ての校舎でした。それでも、入学した時は、大きな校舎だなあと感じましたし、4年生になったら2階の教室で勉強できるのだと楽しみにしたものでした。この頃は2階建ての家もあまりなかった時代でした。

おそらく、私が2年生か3年生かの時に、校舎が新築されることになり大きな工事が始まったのです。その校舎は、鉄筋コンクリート3階建てでした。詫間小学校で言えば、東館（音楽室や図書館がある校舎）のような建物ですので、皆さんもすぐにイメージできると思います。一気に私たちの夢は膨らみました。「きっと、5年生になると、2階どころじゃなく、3階で勉強ができるかもしれないぞ!」と友達と話したものでした。

確か、私が4年生の頃に新校舎は完成したと記憶しているのですが、なぜか、低学年が優先で新しい校舎に入り、私たちは、卒業するまで木造校舎で勉強したのです。もしかしたら、一時は文句を言っていたのかも知れませんが、木造校舎は、それなりに味わい深い事もありました。

まず、木造ですので結構、隙間があります。床も壁も窓枠も戸も全て木でできています。時々、ワックスがけをしますが、その時は、スケートのように床が滑って楽しかった思い出があります。隙間だらけの教室ですので、夏は涼しく、冬は寒いのです。新しい校舎は、隙間風が入らないのでストーブはありませんが、木造の校舎にはストーブが入ります。石炭ストーブから、途中で石油ストーブに変わったと思います。ストーブでお湯を沸かしていましたので、教室に湯気が立っていました。ストーブの近くは暑いくらいで、教室の端の方は、頭の方だけ暖かかった記憶があります。

一方、床はギシギシと音を立てるので、ゆっくり歩かないと先生に叱られてしまいます。一番おもしろかったのは、床には、節穴が所々にあって、そこから下の教室の様子が覗けるのです。時々、小さくなった消しゴムが床に転がり、その穴から下の教室に落ちてしまうこともありました。中には、わざと、何かをその穴から落として楽しんでいる友達もいました。ですから1階の教室の時には、時々、天井から物が落ちてくるということもありました。大らかな時代でした。それが当たり前だったので、珍しいことでもなく、あまり文句を言う子もいませんでした。

今はもう、木造の校舎というのはめったに残っていないと思います。私が小学生の頃から、どんどん鉄筋コンクリートの校舎（3階建て・4階建て）に変わっていきました。日本は、高度経済成長のまっただ中だったのでですね。

体育館は、卒業するまでありませんでした。代わりにあったのが、広い教室みたいな「講堂」です。天井は、教室よりちょっと高いくらいで、広さは、教室を2つ合わせたくらいの縦に長い木造平屋建てでした。ここで、卒業式や入学式をしましたが、朝礼（全校集会）は全て運動場でした。講堂は、天井が低いので、体育はしにくく、マット運動や跳び箱くらいはやっていたような記憶があります。この頃は、体育というのは運動場でやるものというのが常識でした。

粟島中学校には講堂というものがあります。イメージとしては、だいたい同じですので、粟島に行く機会があれば、ぜひ見てください。

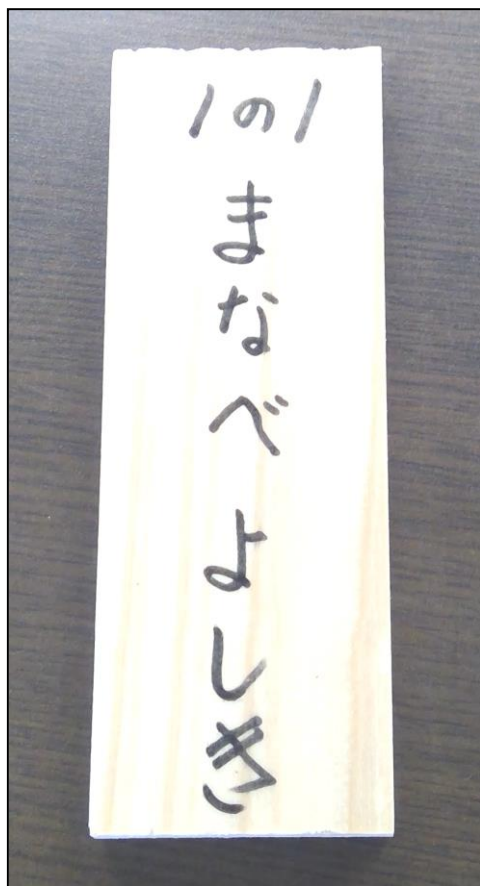
詫間小学校の校舎は、廊下も広くて全ての教室、エアコンが完備されていて、エレベータもあります。私が小学生の頃には、想像することもできなかった夢のような校舎で、詫間小学校の子どもたちは勉強し、給食を食べて、学校生活を過ごしているのですね。

かまぼこ板（水泳の命札）

「かまぼこ板」を知っていますか？木の板に半円形の「かまぼこ」がのっかっていて、かまぼこを食べた後は、木の板だけが残るわけですが、その板のことを「かまぼこ板」と言います。

先日、かまぼこを板から切り落として、この板をゴミ箱に捨てようとして、「そうだ。昔は、この板は大事に取っておいたなあ。」と思い、薄く残ったかまぼこを包丁でそぎ落として洗い、少し干して乾かしておきました。「取っておけば、いつか何かに使うことができそうだ。」といった気持ちからでした。

私が子どもの頃は、少なくとも、この「かまぼこ板」の使い道の一つは決まっていました。それは、水泳の時に使う「命札（いのちふだ）」でした。



左の写真が、水泳の時に使う「命札」です。簡単に言えば、かまぼこ板にマジックで、自分のクラスと名前を書いただけの物です。この板が無ければ、プールに入ることができなかつたのです。

この板を水着バックの中に入れておきます。昔は、ゴーグルなんて無かったので、水着バックの中は、バスタオルと水着と水泳帽とこの命札です。この命札のために、かまぼこ板を取っておくか、水泳が始まる前に、かまぼこを食べるかをしなければならなかつたのです。

では、この板の使い方ですが、プールの入口の所に机が置いてあって、プールに入る前にこの板を机の上に並べます。こうすることで、「1の1の まなべ よしき」がプールに入っていますという合図となります。担任の先生は、この板の数と、実際の子どもの数を数えて一致すれば水泳開始となります。ですから、この命札を忘れるとプールに入ることができないというわけです。そして、水泳が終わると、プールから上がって、各自この板を取りに行きます。必ず自分の板だけを取ります。板が無ければ、その子が取り忘れているか、または、まだプールの中にいるかのどちらかということになります。プールの中にいるかどうかは、プールの上からでも分かるでしょう？と思う人も多いかも知れませんが、昔のプールは、浄化装置（水をきれいにする機械）が無かったので、いつも白く（時々緑色だったが）にごってました。今のように水が透き通ってはいませんでしたので、ちょっと見ただけでは分からなかつたのです。まさに、子どもの命を守っていた札なので「命札」と呼ばれていたのだと思います。

この命札は、おそらくどこの学校にもあったと思います。プールに浄化装置が整備されるようになってから、徐々に、この札は姿を消していきました。わざわざ水泳のために、子どもの数だけ、かまぼこを急いで買うなんてことも、いつの間にか無くなつたのです。

かまぼこ板もそうですが、昔は、けっこうこのような「廃品利用」をしたものでした。今では信じられないでしょうが、「検便（便の検査）」の時、自分の大便を取って、マッチ箱に入れて、それをビニール袋に入れて、学校に持って行きました。そのうち、プラスチック製の容器に変わりましたが、マッチ箱も捨てずに取っておかなければなりませんでした。今考えたら、すごい時代でした。

今は、何でも買えば手に入る時代です。もし、万に一つ、「命札」が復活したとしても、担任の先生がプラスチック板を用意してくれて、それに名前を書く（もしかしたら名前シールをはる？）だけなのかも知れませんね。

子どものころの夢について

先日、放送委員会からアンケートの依頼がありました。その中に、「子どもの頃の夢は？」とか、「子どもの頃の自分に言ってあげたいことは？」という項目があり、何気なく答えて返しました。すると、お昼の放送で、それを紹介してくれました。自分の子どもの頃の夢を、放送委員さんが紹介してくれているのを聞きながら、「何か物を作ったり直したりする仕事をしたい。何でもいいから日本一になりたい。」という子どもの頃の夢は、本当にそうだったのか、もっと他にもあったのではないかと考えはじめました。

年を取っていくと、「最近のことはすぐ忘れてしまうが昔のことはよく覚えている。」という感じがあるのですが、こと「将来の夢が何だったのか」と考え始めると、どうもはっきりとしないのです。確かに、「何か物を作ったり直したりする仕事をしたい。何でもいいから日本一になりたい。」という夢をもっていたことは、まちがいないのですが、他にもあったような気がします。でも、それがどうしても思い出せないのです。とっさに出た答えが、きっと合っているのだらうと思ひまして、一応、子どもの頃の夢としてしまったわけです。

おそらく、はっきりしないのは、きっと、次々と「将来の夢」が変わっていったからではないかと思うのです。もしも、今、「将来の夢は？」と聞かれたら、きっと「～したい。」「～になりたい。」と答えられると思います。そして、今から20年くらい経って、60歳の頃の将来の夢は？と聞かれても、だいたいのは覚えているのではないかと思うのです。それは、人生の可能性の幅が狭くなってきているからなのかもしれません。言い換えれば、子どもの頃は、日々成長していきますし、無限の可能性を秘めているわけです。例えば、小学校1年生の時に、ケーキが大好きだから「ケーキ屋さんになりたい。」という夢をもっていた子が、小学校5年生からサッカーを習い始めたら、「サッカーのワールドカップに日本代表で出場したい。」という夢をもつようになります。夢も成長に伴い、また生活の変化に伴いどんどん変化していくものなのでしょうね。特に、子どもの頃は…。

夢は、大きいほどいい、とよく言われますが、今考えたら「何でもいいから日本一になりたい。」というとてつもなく大きな夢を私はもっていたわけです。でも、この夢は、実は今ももち続けているのです。「詫間小学校を日本一の学校にしたい。」と。子どもの頃から変わっていないのですね。これが、60歳（還暦）を目の前にした「現在の夢」なのです。きっと20年後でもはっきりと覚えている将来の夢なのです。

ただ、年を重ねて変わったのは、何かと比べて、誰かと比べて「日本一」というのではなく、自分自身が「日本一だ！」と実感できることが夢となりました。その意味では、現在は、夢に近づいています。時には3歩夢に向かって進み、時には2歩後退しながらも、私の気持ちの中では、少しずつ確実に夢に向かって進んでいると思います。

もう一つの質問、「子どもの頃の自分に言ってあげたいことは？」について、私は「そんなことで悩まないでいいよ。あなたは少なくとも60歳までは、幸せに生きていますよ。」と答えました。これも間違いのない「思い」なのですが、今、考えたら少し違うような気がします。言い直しを許されたとしたら、こう言いたいと思います。

子どもの頃の佳樹君へ

あなたは、勉強せずに遊んでばかりです。物を壊すばかりしてしかられっぱなしです。落ち着きが無く、じっとしてられない性格ですね。先生からも、「10分くらいじっとできないのですか！」としかられていますね。そして、いつも、独り言ばかり言っています。「うるさい！」とお姉さんにしかられていますね。でも、何の心配もないよ。物を壊すことで学んだことが、今は、物を作る力、直す力に変わっていますよ。じっとしてられないのは変わっていませんが、かえってそれが、みんなの役に立っていますよ。そして、その独り言は、約50年後にあなたは校長先生となり、学校便りの裏に「独り言」っていう文章を書いて皆さんに読んでもらうことにつながるのですよ、と。